おふたいむ

理想のファミリー目指し

久御山町国保健康課長

中務 一弘 氏

久御山町役場の1階ロビーに、幻想的な一角がある。豊臣秀吉が利休に命じて作らせたとされる茶室を復活した現代版「黄金の茶室」だ。話題を集めた「お茶の京都博」の目玉として、デザイン・設計に東京大学を迎え、「ものづくりのまち久御山」の技術力を結集し、産学官連携で制作した芸術作品である。

そのイベント責任者の産業課長から今春、国保健康課長になった。「最近こそ、課員に偉そうに言っていますが、いわゆる窓口業務である民生関係の仕事は初めてで、当初は戸惑いの毎日でした」と話す。大筋のところは課員に聞きながらも、根本的なことは自分なりに調べ、勉強もした。「人に聞いて分かるのと、自分で勉強して分かるのとは理解の仕方が違うと思うんです」。経験を通して語る言葉に自負を感じた。

先輩からのアドバイス

初めて課長になった産業課長の時、先輩からこんなアドバイスをされた。「課長の両腕には課長補佐もいるんだから、課長だからといって一から十まで知っておく必要はない。それよりも選択を迫られた時や、ここぞという分かれ道に立たされた時に、一定の方向性を課員に示すことができるか、どうかが大事だ」と。その言葉を、今も胸に刻んでいる。

「4月の課の歓迎会で、理想のファミリーとして、こんな課にしたいとの思いで、三つのことを訴えました」。少し照れながら、その内容を教えてくれた。「風通しのいい課にしよう。仕事はメリハリをつけてやろう。一人で悩まず何かにつけて協力し合おう」と。「酒も入った席なので、聞いてくれていたのか分かりませんが」。長身で、一見クールに見えるが、笑うと目が実に優しい。

「黄金の茶室」の前で

実務の中で、課員に言い聞かせていることがある。「前例に囚われることなく、常に改善の意識を持つこと」「例えば健診の案内文を出すにしても、住民さんの立場に立って、分かりやすい内容にしてほしい。僕はこれからも住民目線でしゃべるから、間違っていたら指摘してほしいと言ってあるんです」

『『どうしましょう』と直接、僕に答えを求める前に、まず係の中で協議し、『こうしようと思っていますが』とたたき台を持って、相談に来てくれと頼んでいます」。「理想のファミリーにはまだまだ遠いですが、みんなのおかげでいい方向にいっていると思います」。うれしそうな表情で手応えを語ってくれた。

これは職業病ですかね

役場に入ってからもサッカーをやっていたが、運動不足は否めない。今の職場に異動し、特定健診やがん検診などの保健事業を実施しているうちに、自身の健康が気になりだしたという。「公務員は異動がつきもので、行った先々の職場の影響を受けるのですが、50代になったこともあり、最近は健康長寿を目指し、夕食後に犬と散歩するようになりました。これはいい意味での職業病ですかね」。大きな声で笑った。